

〔課題演習抄録〕

キャリア教育の要としての学級活動(3)の研究
—課題解決の方法を意思決定する授業モデルの提案—

近 藤 彰 信

Akinobu KONDO

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：学級活動(3)，キャリア教育，意思決定，授業モデル

1 研究の目的

(1) 主題・副題の意味

平成29年公示学習指導要領（以下、学習指導要領）第5章特別活動の学級活動の内容項目に「(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現（以下、学活(3)）」が新設され、特別活動がキャリア教育の要を担うこととなった。「要」という表現は、これまで、学校教育全体で行う道徳教育を道徳の時間に“補い、深め、まとめる”という意味で用いられてきた。このことから、特別活動をキャリア教育の要とするということは、学校教育全体で取り組むキャリア教育を、学活(3)の授業で補い、深め、まとめることであると考え。このことを受け、学習指導要領解説特別活動編には学活(2)(3)の学習過程が例示として示された。学活(3)は目標から将来の生き方に関する課題の解決方法を意志決定して実践する学習であるが、ここに示された学習過程では具体的にどのような学習を行えばいいのかが分かりにくいので具体的な授業モデルを提案したいと考える。

(2) 研究の目的

本研究は、キャリア教育の要と位置付けられた特別活動の学活(3)の授業モデルを提案するものである。授業は、小学校特別活動指導資料（以下、指導資料）（文部科学省、2014）に示された学級活動(2)の「つかむ→さぐる→見付ける→決める」の学習過程と学活(3)プランニングシート（脇田、2018）を参考に構想を行い、事後アンケート調査から授業モデルの有効性を検証する。

2 研究の計画

研究計画は表1に示した通りである。

表1 研究計画

M2 前期	4～5月	研究構想・理論研究
	6月	授業構想・教材作成
	7月	授業実践Ⅰ・授業分析
	8～9月	研究計画・構想の修正
M2 後期	10月	理論研究 授業構想・教採研究
	11月	事前アンケート調査・分析
	12月	授業実践Ⅱ・授業分析
	1月	事後アンケート調査・分析

3 研究の内容

(1) 研究1（意思決定と振り返り）

本研究において非常に重要なポイントとなるものは“意思決定”である。自己実現を達成するためには自身の意思で物事を判断して実践する態度と考え方が求められる。では、そもそも意思決定とは何なのか。Gilboa(2015)は著書のなかで、意思決定とは複数の方法や答えのなかから自身が判断して決める認知的活動だと定義している。ここでおさえておくべきは、複数の方法や答えが存在していないと意思決定とは言えない点である。加えてGilboaは、意思決定が真に良い判断だったかは意思決定者自身がその行為と実践を振り返り評価するものと述べている。

子ども達は人生において様々な場面で意思決定を行う機会があると考え。その一つ一つの意思決定が将来に少なからず影響力を持っている。この意思決定の意義と大切さを知らなければ、本当のキャリア教育は実現しないと考える。よって授業実践Ⅰでは、子ども達に意思決定の在り方を意識させ、意思決定したことの実践と振り返りが大切であることを伝えるとともに他者との話し合い

活動を通して、自身に見合った意思決定が行えるように学級活動(3)の授業づくりでは留意した。

授業実践Ⅰの内容は以下の通りである。

授業実践Ⅰ

- ・実践期間：平成30年7月10日
- ・対象：北九州市公立中学校 第2学年
- ・題材：「夏休みを有意義に～これからの進路選択に生かす学習プランづくり～」

授業実践Ⅰの一成果としては、子ども達が自身に見合った学びの計画を作成できたこと、意思決定の大切さに気付きだしたことが挙げられる。ワークシートの振り返りに「先生から言われてやる勉強よりも、自分で決めた勉強のほうができる(実践できる)ように思う」といったニュアンスの記述が多く見られた。一方で課題が多く浮かび上がった授業実践でもあった。まず、子ども達の実態把握不足であったために興味・関心が薄かったことが挙げられる。また、中学生共通の実態として大勢の前で発言することを躊躇する傾向にあるにも関わらず、全体での話し合い活動を行ったために発言等が極めて少ない授業であった。

(2) 研究2 (中学生段階に見合った話し合い)

前回の授業実践での課題であった中学生段階に見合った話し合いを実現するべく、研究2の授業実践では「見付ける」の話し合いを班→全体に行き、話し合いの段階設定の有効性を事後アンケートから検証した。

授業実践Ⅱの内容は以下の通りである。

授業実践Ⅱ

- ・実践期間：平成30年12月6日
- ・対象：北九州市公立中学校 第2学年
- ・題材：「高校選択の基準を考えよう ～自身の強みを活かした高校進学を実現するために～」

授業実践Ⅱの一成果として、班での話し合いはスムーズに行われ、自身の考えだけでなく、他者の考えを参考にした活発な交流が図られ、授業実践Ⅰでの意思決定よりもバラエティに富んだ意思決定を子ども達が行えた。また、事後アンケートの自由記述には「高校を選ぶ基準は人それぞれだということが分かった。人の意見も参考にして3年生では進路を決めたい」という記述が約6割の子どもから挙がった。一方で、全体での話し合いが不十分であったことが課題である。班での話し

合いの結果を教師が指名して挙げさせるスタイルをとったが、自由に意見や主張をさせるスタイルが良かったと考える。これは場合によっては教師主導の話し合いになってしまう。また、生徒が意思決定した自己目標の実現に向けて、どのような実践に取り組んだのかの状況把握や、生徒個々の取り組みの状況に応じた教師のカウンセリングの実施についても今後の課題である。

4 成果と課題

(1) 成果

中学校学習指導要領解説特別活動編に示された、学級活動(2)(3)における学習過程(例)に示された②解決方法等の話し合い、③解決方法の決定という学習過程を明らかにする授業モデルとして小学校特別活動指導資料(国立教育政策研究所, 2014)の「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」の学習過程を参考に考えた。この小学校特別活動指導資料から、②解決方法等の話し合いは「見付ける」段階、③解決方法の決定は「決める」段階に相当することが分かった。

したがって、学級活動(3)の授業モデル(構成)は、小学校特別活動指導資料(国立教育政策研究所, 2014)の「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」の学習過程に準じて行うことで子ども達は課題解決の方法を自分事におとして意思決定することができるものであることが、授業実践Ⅰ・Ⅱから明らかとなった。

(2) 課題

至るところで述べている通り、中学生段階に見合った②解決方法等の話し合いの教師の手法、手だてが今後の授業発展には必要になる。特に学習指導要領では学級全員での話し合いが求められており、「見付ける」段階の学級全体での充実を図らなければならないことが授業実践Ⅰ・Ⅱから明らかとなった。

また、子ども達の意思決定したことの実践度合を確認する追跡調査やカウンセリングの充実も今後の課題として明らかになった。

5 主な引用・参考文献

- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領解説特別活動編
 国立教育政策研究所教育課程研究センター 2014 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編
 Itzhak Gilboa 2015 意思決定論入門
 脇田哲郎 2018 中学校学級活動(3)プランニングシート